

“立ちどまる”

遠藤 悟朗

◆はじめに

わたくしの仕事を念のためにご紹介することにします。

動物を人にならし、子どもたちが安心して共に遊べるようになることです。そしてその場を管理維持しつづける一方、子どもたちがスムーズに動物に親しめるようにしむける活動をするということです。

動物を人にならすためには、ゆるす範囲でその動物を知らなければなりません。動物を知ること自体だいそれた考えかもしれませんが、意図した範囲内で動物の行動が人に受け入れられる状態にすることを考えました。子どもたちが安心して共に遊べる、日入れ替り来園する不特定多数の子どもが対象なので、これまた大変な問題です。動物と人間がそれも柵かきなどをへだてるのではなく、直接ふれあえる姿なのです。

人為的に動物をならすといっても、われわれが行っていること

はそれほど特殊なものではありません。動物のすることを見て、次に行うであろうことを、こちらのサインで行う習慣をつけたり、発育や生存に支障を来たさない活動時間を定めたり、動物を恐れさせずに人との距離を縮めたりすることです。

このような状態で動物に接したり、交渉をもっている間に、動物たちが表題の「立ちどまる」ような姿に出会うことがしばしばです。

その幾つかを記しながら、状態を一緒に考えてゆきたいと思えます。

◆

「ソルはどうして一本足で眠るのでしょう」

笑い話の答えは、両足をあげればひっくり返るといいますが、眠ったり休むようなときでも次の動作に移行しやすい姿をしているのだと考えられています。野生動物のほとんどは、人のように

前後不覚になって眠ることはまれで、動物園などに連れて来られても目ざといものがおおいのです。ツルなどの場合歩きだしたり飛ぶような、次の動作に移りやすく、いうならば足を持ちあげて進む挙動を一つ節約していると考えられています。

鳥類は視覚がすぐれていることは周知のとおりで、哺乳類は一般的にそうでないこともご存知のことだと思えます。

イノシシなどですと顔を目標のほうにむけて見つめるだけでなく、鼻をひくひくさせて臭いを「かぎつめる……」ようなこともします。

ジャイアントパンダは寝ている時間が長いのですが、耳を動かしながら眠っているようなことをしばしば見かけます。

ウサギは目や耳を目標のほうに向けるだけでなく、後足だけで立ちあがりチンチンをするような姿勢をとったりもします。

それぞれの動物はすぐれている感覚器官を巧みに使いながら、次の行動にすぐ移れるように身構えているのかもしれないから、

ところがウサギで起こったことですが、あるとき扉を開放したまままで舎外ではかの仕事をしていました。当園のウサギ舎は床が地上六〇センチのところにありますので、短時間なら戸を開け放しておいてもウサギはとび降りてにげるようなことはしないのです。ほかの仕事のきりがついたので舎内に入ろうとしました。な

れているカイウサギなのに急に狂いだしたように、舎内をかけずり始め、なかには壁にぶつかるものさえいたのです。ウサギたちにしてみれば戸が開放されていたことがよくわからないために、意表をつかれたように、人に近づかれて驚いたことだと思えます。ですから次の行動に移る準備をするゆとりがなくて、反射的にそのような結果をとったのでしょう。以来戸を開けてあるときでもノックをしてから入るようにしたのです。ふつうならば錠の音、戸を開けるときにキシム音が、ウサギに対する予告になっていたわけです。

また、うすぐまったり、立ちすくんで全く動かないような状態にも出会います。

ものかげにひそむ子ジカヤ、巣に残された雛ヒナなどがそうです。危険を察知したときなど、子や雛に限らず親たちでも見かける姿です。動物たちの毛色は周囲の環境にマッチした色合いのものがおおいので、なかなか人目につきません。人だけではなく他の恐しい外敵から、見つけだされずにすむことがおおいのです。立ちどまって動かないことは、それだけで保身の役もしていることになりましょう。

野外でシカやカモンカに出会うと、動物のほうが先に見つけ、立ちどまってこちらを見つめている場面に遭遇します。なれない

と探したすこともそう簡単にはできません。これらおおくの草食獣のひとみは、横に長四角で左右別々にものを見ているのです。

そんな関係上近くの正面やまうしろなど、視野に納まらないところがあるのです。ウマに近寄る注意として古くからいわれていることですが、斜め前からオーラオーラと声をかけながら近づくうりにいわれています。子どもが急に近づいたりすると、驚いて暴走したりすることもあるのです。

カモシカやシカに限らず、野生動物は人に近づかれることを好みません。これからの動物たちは数多くの危険にさらされながら、広い大自然のなかで暮しているのです。生まれた子どものうちで、はたしてどれだけが成熟できることでしょうか。

人が近づぐことのむずかしい大自然での生活は、巧みなバランスが保たれており、動物同志が互いに存続できるしくみになっています。人は新しい交通機関などを利用して、奥地深く入れるようにもなりましたし、原野原生林を開拓して耕作する面積も増えました。自然界のバランスがしだいに崩れる傾向で、動物たち自身の存亡もむずかしくなった昨今です。

難を未然に防いだり、隠遁術、次の準備といった、動物の「立ちどまる」動作だけではたちうちできなくなっているのです。しかし動物は相変らず同じようにしかできないのです。それでも持

って生れた感覚機能をフルに使って、それこそ一生懸命生き続ける努力をしているもののようなのです。

◆
長い年月人と生活と共にしてきた家畜たちは、祖先形の動物とは違いすぎるほど変わってしまいました。

食べることや育てゆくうえで不自由がない生活が保障される代りに、いのちを人に提供しています。時代の推移にともない合理的な管理が進められ、卵や乳それを肉などを生産する機械のようになら変わってきました。

バッテリー式という狭い籠に入れられたニワトリは、完全配合飼料を届くところまで運んでこられ食べたいときに食べられ、水も飲みたいときに飲めるのです。エアークンデিশヨニングが備わった部屋で、糞尿は自動的に運びだされて清潔です。生長した卵には産卵、卵はころがって籠の外に出て行きます。自動的に運びだされて選別、箱づめにされて市場に運搬されるのです。

ニワトリのグループの平均産卵能力が一定水準を下まわるころ、体は肉・内臓・羽毛に分けられて市場に連れ去られます。

種鶏と呼ばれるエリート？ は、数多くの競走者の中から選びだされ、よい種卵をたくさん求められます。生んだ種卵はふ卵器

でふ化されると、雌雄鑑別され、めすは消毒が終わったバッテリーへ移されるルートに乗せられます。おすのひよこは直ちにブタのえさに始末されてしまいます。種鶏だといって一時はチャホヤされたにせよ、停年後？ はその他同様この世にさよならをするのです。

バッテリーをはじめ畜産用語の代りに、団地、競走、試験などの人間が使用する字句に置き変えると、われわれ人間もいつのまにかに畜産的手法を組み入れられてしまっていることを、改めていぶかります。

またヤギの群れを動物園で小屋にもどすとき、入ってすぐの出入口のところに立ちどまります。数頭がそんな場所に立ちぶさがれば、残りは入るわけにゆきません。ヤギが言葉が話せるとしたら、立ちぶさがっているヤギは「いわれたように入ったではないか」と反論するような顔つきです。このような考え方をするのは、ひょっとすると人間だけではないのかもしれない。

コイに手からえさを食べるようにならしていたときですが、もう背中あたりをさわらせるだろうと手をさしのべました。えさを食べることも急にやめてコイは水しぶきをあげて逃げ去りました。それでいてえさを奪いあうように自分では人の手を体で押しのけたりもするので。結果は同じようなのにどうしてこのよう

に違うのか不思議です。電車の中で人にふれてくる婦人がいるかと思うと、押されてわたくしの方がさわるようなときにとび上がるような人もいますので苦笑してしまいます。

コイにえさを与えるところをおもしろそうに見ていたの、わたくし以外でも指をしゃぶりに来ることを告げました。とたんに「危いから池に手を入れてはいけません」と子どもにも注意しはじめたのです。

不特定多数の人たちの中にはいろいろの人がいるのは当然でしょうが、その人はどう見ていたのか理解に苦しみます。前後の事情と関連させて考えられないものか、また一体なにをいままで見ているのか不思議です。

見ていればわかることですから視覚を使っていないのかとさえ考えます。文化的ですみ心地のよい平和な生活をしていると感覚などが鈍るのでしょうか。

「立ちどまる」人間的なそして現代的意義は、すべての感覚を動員して体で理解する、ほんとに理解したりする一歩手前の過程だと考えます。

動物たちの「立ちどまる」それを温かくカバーする意味でも、わたくしたちもじつくりと「立ちどまる」ゆとりを持ちたいものだと思えます。

(上野動物園)